

田村泰次郎研究 (三)

「蝗」論

尾西 康充

序

二〇〇七年四月二七日、最高裁判所は日中戦争での強制連行および慰安婦の戦後補償に対して、個人による戦時賠償の請求は認められないという判断を示し、原告の請求を棄却した。「日中共同声明」第五項（一九七二年）の「中華人民共和国政府は、中日両国民の友好のために、日本国に対する戦争賠償の請求を放棄することを宣言する」をふまえたものであったが、判決文のなかで旧日本軍による関与自体は認めている。田村泰次郎の「蝗」（「文芸」一九六四年九月）は、北京と漢口を結ぶ京漢鉄道の打通を目指した京漢作戦に際して、主人公原田軍曹は、戦死者の遺骨を納める白木の箱と前線の一万人の兵士の相手をするための五名の朝鮮人慰安婦を前線の部隊に送り届ける。原田は半年前、兵団司令部とともに黄河を渡ったが、あらかじめ用意した白木の箱では足りなくなつて一旦原駐地まで戻り、作戦に参加する人員の三分の一に当たる数の白木の箱を調達して

きた。能見山上等兵と平井一等兵、そして軍の御用商人金正順とともに京漢線の鉄道で南下する。彼らが輸送する白木の箱と慰安婦には戦場の暗部を象徴する（死）と（性）のイメージが託されている。

原田たちが黄河の南岸に到着すると早速、朝鮮人慰安婦が同乗していることを無線で聞きつけた他の部隊の將校が、彼女たちを列車から降ろして兵士の相手をさせると要求してくる。慰安婦に群がる兵士たちの姿は「飢え、渴いた、角のない昆虫のような、彼らは砂地の上に二本の白い太腿をあげつひろげにした女体の中心部へ蠕集した」と比喩的に表現されている。この作戦に参加するために中国大陸の各地から移動してきた兵士たちは、当時異常発生していた蝗の大群と同じように「蝗たちは蝗たちの、人間にはわからない意志によつて移動するのかも知れないが、兵隊たちは兵隊たちで、彼らの意志でない命令によつて移動する」。ここで作品の背景となつた京漢作戦の概要を

説明しておこう。

一九四三年秋頃から江西省遂川を拠点とする米空軍が制空権を握りはじめ、東シナ海を航行する船舶が相次いで撃沈された。B二九による本土爆撃の危険も迫っていると感じた参謀本部は、中国大陸を南北に縦断する京漢・粵漢・湘桂鉄道を打通して重慶軍に打撃を与え、ともに米空軍の基地を破壊する一大作戦を計画した。秦次郎が配属されていた独立混成第四旅団は一九四三年五月に第六二師団(通称石部隊)に編成替えされており、一九四四年四月四日から原駐地の山西省晋中市榆次県を出発して河南省に南下し、四月一七日までに黄河北岸の新郷市に集結した。太行山脈と中条山脈に囲まれた高地のため春が遅い、「山西ではまだ麦がのびないといふのに、ずっと南にさがった河南では、もうこのあたりに多い桐の樹が、若葉につつまれておました」という(1)。近年は地球温暖化のために四月半ばには、桐の樹は薄紫の花が満開になって若葉も繁っている。「蝗」では、原田軍曹と朝鮮人慰安婦が乗った「列車はよほど南下したらしく、むうっとする車内の熱気は、息苦しいほどになった」と気温が急上昇したことが描かれている。

コ号作戦という作戦コードが与えられた京漢作戦には、それまで華北に展開していた北支方面軍の第二二軍(第三七、六二、一一〇師団、戦車第三師団、独立混成第七、九旅団、騎兵第四旅団)と第一一軍(独立歩兵第一一旅団)、第一三軍(第六四、六五師団の各四大隊)、第一軍の一部、第五航空軍の一部が動

員された。北支方面軍の総力をあげての作戦となったのだが、攻撃対象である重慶軍第一戦区の湯恩伯副長官が指揮する九〇一〇軍、総勢三五〇四〇万人も手強く、人一七万馬八・五万匹の損害が見込まれた。だが兵力が次々に南方に転用されるなかで補充は難しく、「四月初頭から逐次鮮満經由」で送られてきたが「全然装備を持たず、小銃も数名から十数名に一挺程度、個人装具もつけていない」状況で「ただ竹の筒を水筒代わりにぶらさげているだけという貧弱」なものであったという(2)。

黄河を渡る際に利用する黄河鉄路大橋は一九〇五年一二月に竣工し翌年四月に開通した。全長三、〇七三メートルの長大な鉄道橋は、旧日本軍が侵攻した一九三七年に重慶軍によって破壊されたままになっていた。そこでまずそれを復旧し、鉄道橋の上流に徒歩部隊が通行できる仮橋を完成させた。しかし重慶軍は南岸に陣地を構え、渡河を阻止しようとしていた。秦次郎の「沖繩に死す」(「風雪」第一卷三号、一九四七年三月)には、黄河をわたったときの状況が詳しく描写されている。

私の部隊が黄河を渡河したのは、四月一五日の夜ふけでした。四軒近い仮橋を馬と一緒にわたるときは、風のため橋がゆれてゐて、張りわたした通信の電線がごおつと頭

の上で喰りつづけてゐました。月のない夜でしたので、黄河の水音を下に聴きながら、幅狭い板の上を足もとに気がつかひつつ、やうやくにわたり終えました。深夜の南岸の渡河点は、荷物を背負つて狂奔する馬の嘶き、罵りあふ兵隊の叫び、叱咤する将校や下士官の声で、まったく物凄い混雑を呈してゐました。

泰次郎が配属されていた第六二師団独立歩兵一三大隊は、師団直属の予備隊として軍の後方に詰め、前線に出ることはなかった。それでも重慶軍の砲撃と米軍の空襲を警戒しながら右のように緊迫感をもつて黄河を渡つたのである。歩兵と一緒に渡河しているのは「師団機動力増強のため多数の蒙古馬を徴発してきた」馬で、「この作戦のために何箇月も前からわざわざ蒙疆で肥らせた、力の強い、ぶんぐりとした大陸馬」であつたといふ(3)。旧日本軍は渡河後、四月二〇日朝六時と決められた総攻撃がはじまるまで、栄陽市広武鎮霸王城村の山腹の洞窟に身を潜め、同じような洞窟に陣地を構えていた重慶軍に対峙していた。右の引用から推定すれば、泰次郎が兵団司令部とともに最初に黄河を渡つた「四月一五日の夜ふけ」の半月後、つまり五月一、二日ごろに原田は二度目の渡河をおこなつたことになる。

ところで霸王城は紀元前二〇三年、項羽と劉邦が一年間対峙したところでもある。東に項羽が立てこもつた霸王城、西に劉

邦が立てこもつた漢王城があり、その間には長さ四キロ幅三〇メートルの鴻溝と呼ばれる谷がある。劉邦は相手が犯した一〇の悪事を並べ立て、それに腹を立てた項羽は矢を放ち、劉邦の肩に突き刺さるというエピソードがある。目と鼻の先で両者はにらみ合つていたのである。今では「漢霸王城」という観光名所になつている人口六〇〇名の村には、旧日本軍の洞窟の跡だけでなく、彼らが満州から運んできて使用したという大砲や機関銃も遺されている。京漢作戦では自軍の洞窟は番号で呼び、敵軍のものは「サケ」「マグロ」「クジラ」などの名称をつけて呼んだ。村の住民である宋甲祥氏(八〇歳)に抗日戦争当時の話を聴いた。黄河を渡つて鄭州に侵攻しようとした旧日本軍は一九四一年九月一日、この村にも来襲した。若者は逃げ老人と子どもだけが村に残つた。三日間待つたが若者が帰つてこなかつたので村人三〇〇名を虐殺した。近くには彼らが殺された万人坑の遺跡があるといふ。宋氏の両親も洛陽の山中に逃げ込んだといふ。旧日本軍が占領した後は、周辺一帯は「無人区」として指定され中国人の立ち入りが禁止された。霸王城陣地の洞窟に立てこもつていたときの状況を、再度「沖繩に死す」から引用してみよう。

渡河点に近い霸王山陣地の山腹の洞窟の総攻撃開始までの幾日かを、私たちは過ごしました。私は北岸にゐるとき

から発熱のために身体をあつかふのが苦痛でしたが、進撃の準備に大騒ぎのなかで寝てゐるわけにも行かないので、無理をして動いてゐました。昼も夜も、渡河点や、そのあたりの地隙の道は、兵隊と、馬と、砲車と、行李と、北岸地帯からの徴用住民とでまつたく火事場のやうな混雑を呈してゐました。そんなところを突然、敵機が襲撃することがありました。

京漢作戦当時、参謀本部は米空軍が広西省桂林と遂川、湖南省衡陽に戦闘機約一六〇機、爆撃機九〇機を配備していると予想していたが、さらに増強されていとも考えられ、前線の部隊は空からの攻撃を連日受け続けた。「蝗」には、黄河を渡る際にも「昼間の渡河は、いつ敵の戦闘機P四〇の銃撃を受けるかも知れないので、危険であり、大部隊の行動は夜間にきめられていた。地上は日本軍の制圧下にあつても、制空権は敵ににぎられていた。夜があけると、P四〇はきまつて南方から機影をあらわし、わがもの顔に日本軍の上空をとびまわつて、容赦のない銃撃をほしひまにしました」という。原田たちの輸送隊も攻撃を警戒して夜間だけの移動になつた。

夜間だけの進撃をつづけることによつて、日本軍は河南平野の大半を占領してゐるが、陽のあるうちはあらゆる行動を停止して、住民の逃げた、ひと影のない部落にひそん

でなければならぬという奇妙な作戦であつた。戦場生活の長い原田軍曹にとつても、そんな作戦は、はじめての体験であつた。だが、彼はそのことが、まだ日本軍が、戦争の全局で、類勢を見せはじめてゐることであると解せなかつた。

輸送の途中、他の部隊に抱かれた慰安婦たちを能見山や平井は自分たちも抱いてみたいと思う。だが原田は「無事、最前線の自分の部隊へ届けねばならないという自分の任務に対する責任感」からそれができない。「この小さな輸送班の統率者であること」を自覚し彼女たちが軍の「公用物」であるという意識が強すぎるのである。しかしいつ死ぬかもしれないという不安が強くなるほど「自分の生命の火が日ごとに煌々と明るくなつて燃えあがつて行く」のを感じざるを得ず、「ふたたび、生きて帰れるか、どうか、誰にもわからない、いまというとき、女体を力一ぱい抱き締め、生の確証をつかみたいという欲望」が燃え上がる。だが性欲に焦がれた「自分の内部のたたずまい」が彼女たちに察知されることを「恥かしい」と感じ、さらに「兵隊としての虚栄心」も重なつて、原田の心のなかでは「血みどろな格闘」が演じられていた。檢次にいたときに何度か慰安所を訪れたことがあつたにもかかわらず、原田が目の前の彼女たちを抱くことができなかったのは、このような「恥ずかしさ」や「虚栄心」のためであつた。

しかしそれ以上に、原田は危険な輸送の旅を通して彼女たちと「あらゆる瞬間、あらゆる場所で、死によつて絶えず待ち受けられてゐる共通の運命を持つ者の同族意識」で結ばれるようになっていたのを感じていた。彼女たちを重慶軍や米軍からの攻撃から守るだけではなく、自軍の「兵隊といふ飢えた獣たちの、肉体の、休まない襲撃」から守らなければならなかったのである。

原田たちは彼女たちを、一しよに行動してゐる兵隊たちの眼から隠すために、夜間の行軍ちゆうも、気を使い、彼女たちには口を利きあうことさえも禁じ、夜明けに休息のための部落にはいると、なるべく、部落の端つこの民家に逃げこむ。住民と敵とが別のものではない敵地区のなかでは、そうすることは、つねに、住民たちにもつけられ、敵に通報される危険がともなつてゐるのであるが、原田はそうするより仕方がなかつた。それを避けて、兵隊たちの宿営してゐる部落の中心部に泊れば、こんどは彼女たちは兵隊たちにみつかり、たちまち、彼女たちは明日の生命の保証のないといふことで自暴自棄的な気持になつてゐる、兵隊といふ飢えた獣たちの、肉体の、休まない襲撃を受けねばならないのである。

敵軍だけではなく自軍の兵士の襲撃に備えなければならぬ

という二重の防備は、戦場の底辺におかれた従軍慰安婦の悲劇的な立場を表している。このとき彼女たちとともに行動していた原田は、彼女を輸送するという軍務よりも、彼女たちと危険を共有しあつて生きる自己の立場を強く意識しはじめていた。やがて地雷を踏んで右足を失うことになるヒロ子を抱こうとしなかつたのも彼女を「人間として身近に感じるように」なつたため、彼女に「多数の兵隊たちを、日毎夜毎に、迎え入れては送りだす、つめたい機械のやうな女性」ではなく「心を持ち、愛情をひと一倍豊かに持ち、それを表現する、敏感な、そして、まちがひなく、呼吸をしてゐる、まぎれもない人間らしい女性」を感じていた。現代の人権感覚からすれば決して十分なものとはいえないものの、彼女たちがおかれた状況を理解しようとして「深い、強い人間的な思慕」を抱きはじめていたのである。

二

原田たちは黄河を渡つた後、実際に第六二師団が進撃していたのと同じコースをたどり、鄭州からさらに南下して謝庄、薛店、和尚橋、許昌に至つて西に進路を変え、禹県（現禹州市）に到達した。静かな四合院で休憩中にヒロ子は地雷を踏んで右足を失う。すぐに原田は彼女を患者収容所に連れて行くことを衛生下士官に依頼するが断られ、車両部隊の隊長に彼女の移送を依頼するが「廃品はどんどん捨てて行くんだ」と断られる。

結局、彼女を独り残こしてつぎの目的地に出発してしまう。再び出会った蝗の群れに「恐らく、自分だけのはつきりとした意志があるわけではなく、すべてを集団に任せて、自分自身は目的を持たない、盲目の飛翔をつづけてゐる。そして、その行きつくさきには、確実に、死が待つてゐることだけはまちがいが無いのである。それはなにも、蝗だけではないにちがひない」と思う。蝗の大群が風に吹かれるまま当てのない飛翔を続けているように、兵士たちも集団に任せて「盲目の飛翔」を続け、やがて確実に死を迎えるのである。

原田たちは、冬越えの麦が生長した広々とした麦畑のなかの道を進んでいると、不意に鼓膜が破れるほど大きなエンジンの爆音を聞いた。敵機P-104は上空を旋回し何度も地上の部隊に攻撃を加えた。朝鮮人慰安婦のマチ子とみどり、軍の御用商人金正順が即死した。平井がマチ子と「麦畑のなかで、折り重なつてゐるところを、一発で同時に二人とも腹部に貫通銃創」を受けたのは彼が「マチ子を護ろう」として、彼女の身体の上におおいかぶさつてゐたのにちがひない」と考えられた。平井は「胸部疾患で一年近くも北京の陸軍病院にいて、原隊へ復帰してきたばかり」の一等兵であつた。三重県立図書館に所蔵されている田村泰次郎文庫には、右腕を負傷して療養している泰次郎の写真がある。「華北清華大学陸軍病院にて／昭和一八年」と写真の裏には書かれており、平井と同じように泰次郎も北京の陸軍病院にいたことが分かる。これを考慮に入れると、マチ

子の生命をかばうようにして戦死した平井の姿には、従軍慰安婦たちに対する泰次郎の真意が象徴されていたのである。

苦難に満ちた旅程の末、ようやく原田は兵団の司令部に「白沙鎮」で追いつくことができた。実際に第六二師団は五月四日夕刻に「白沙鎮」に到達し、翌日さらに西南の方向に進撃している(4)。原田が高級副官に復命すると「一万の兵隊に、二名じや、どうするんだ」と怒鳴り返される。生き残つた二名の朝鮮人慰安婦が一万人の兵士の相手をさせられるというのである。白沙湖の南にある「白沙鎮」は禹州市皇城から西北一五キロの距離にある。人民公社時代までは白沙鎮と呼ばれていたが、人口が一人以上に増えたために南北二つの村に分割された。作品の舞台になつたのは現在禹州市花石郷白沙北街村と呼ばれる村で、「ひろい大馬路から一つ裏側の、大馬路と並行してゐる細いとおりにある、その鎮の豪族の邸宅」に司令部が設営されていたという小説の場景は、そのまま現地に遺されている。清時代に北京から派遣された役人である楊氏が村の中央に構えた大邸宅は、今も村役場として使用されている。白沙北街村の人々に尋ねれみると、旧日本軍が村に駐屯したのは一泊だけで翌日には移動したという。村人はすぐに避難したために他の村のような被害はなく、家の外に繋がれていた牛が食用にされて死骸が残っていたことや、村の近くに爆弾が三発落ち、後日その鉄を拾いに行った老婆が不発弾の犠牲となつて生きて戻らなかつたことがあつたという。旧日本軍は、村から八キロにある

山の上に戦闘機が離発着できる軍用飛行場とトーチカを建設し、兵士たちが村に姿を現したこともあった。一九四四年秋頃から八路軍豫西抗日先遣隊の皮定均司令がこの辺りの村々を廻って地下組織を作って、軍民一体となった遊撃戦を本格化させたという。

原田の復命を受けた高級副官は「三日前の敵機は、二機撃墜という報告がきている。いくらか応戦したんだな」といい、原田は「はじめて聞く戦果に、自分たちの行動が、まったく、徒労ではなかったこと」を感じる。第六二師団の五月二日の戦果として、「鹵獲品」のなかに「P—四〇二機（地上火器により撃墜）」が報告されており、実際に作品と同じ内容の報告が存在していた（5）。米空軍による地上部隊への攻撃は四月二八日の黄河鉄橋に対する爆撃以後、地上部隊を標的にしたものが増加し（6）、P—二〇による低空銃撃は五月六日にも新鄭の戦闘司令所におこなわれたという記録がある（7）。これらの事実からは秦次郎が史実を重んじながら作品を創作していたことが分かる。

河南省で抗日戦争時代に創作された「水旱蝗湯」という民謡は、水害と旱魃、蝗に加えて、私腹を肥やすために苛敵誅求な租税を課した国民党軍閥の湯恩伯（一八九八—一九五九年）を諷刺する内容である。一九四二、三年は空前の大旱魃に見舞われ、大麦も小麦も顆粒のために実を收穫できずに枯れ果てた。一九四一年秋、四二年春、四三年秋には六ミリ大に異常成長し

た蝗が大発生し、天を遮り陽を蔽う大群がマメやトウモロコシ、コウリヤンを根まで食い尽くしてしまった。しかも一九三七年以来、一〇万人を超える重慶軍が河南省に常駐し、彼らの食糧を供出し続けなければならなかったので、農民は窮乏を極め山西省に逃亡する者が続出した。人身売買が横行し犬が人を喰い、人が人を喰うような飢餓地獄であった。一九四二年の一年間に河南省では三〇〇万人が餓死したといわれている。このような状況であったにもかかわらず湯恩伯は自己の権力を恣にして私腹を肥やし、民間人を徴発して大量の私財を隠した。さらに前線で熾烈な戦闘がおこなわれている間も魯山温泉に沐浴していた。彼の倉庫が旧日本軍の手に落ちたとき、兵士約二〇万人分に相当する麵粉一〇〇万袋が発見されたという。湯に対する農民の恨みは骨髄に達しており、彼らに軍糧を放出した旧日本軍に協力する者たちまで現れて、京漢作戦の「数週間に、約五万人の中国兵士が自らの同朋に武装解除させられた」たほどであったという（8）。

その一方で京漢作戦の終了後、河南省の新たな占領地では旧日本軍による事件が多発し、洛陽王山寨の「惨案」をはじめとして陝県や臨潁県などで多大な犠牲者を出した（9）。一九四三年秋に大発生し農村を食いあらした蝗の大群に遭遇したという第六二師団参謀の廣瀬頼吾大尉は自嘲気味に「皇軍が尽滅作戦と称し蝗軍」になったことを回想している（10）。「沖縄に死す」には蝗は登場せず、旧日本軍につきまとい黄河を渡つ

たのは「山西あたりの蠅とはちがつた精の強い、黒豆ほど」の蠅であった。「沖繩に死す」を発表してから一七年が経ち、泰次郎は同じ京漢作戦を素材にした作品を新たに創作するのの際して、当時の中国の社会を反映すると同時に旧日本軍の大移動を表現するために、〈蠅〉よりもさらに象徴的効果の強い〈蝗〉の形象を使ったのである。

作品の最後、原田は輸送の任務を終えた後、「生のあかしである満足感」を「確実につかむ」ために慰安所に出かけた。そこには自分が楡次から連れてきた京子であった。彼女と体を合わせようとすると、彼女の内股の奥にある「亀裂」と右の太腿のあいだに「一匹の褐色の蝗」が「よちよちとはつてゐる」のを目撃する。

が、女の身体はさつきからの人間の能力の限界を超えてゐると見える、つぎつぎと彼女の前にあらわれる、果てない兵隊たちとの格闘で、その部分が完全に麻痺してしまつたやうに、そのことに気づかないのか、気づいてゐても、それを手で払う気力さえないのか、節くれだつた六本の肢と、堅い羽根を備えた昆虫の、はいずりまわるのに任せて、完全に死んでしまつてゐるなにかのやうにぐつたりと、そこにのびてゐた。

朝鮮人慰安婦たちと移動中には彼女たちを抱こうとしなかつ

た原田がこのとき慰安所に入ったのは、再び性欲に疼く一般兵士の意識に戻つてしまつたといわざるを得ない。だが移動中に「大集団の移動にとり残された蝗たち」の存在を知つたことによつて以前の彼とはちがつた視点を持つようになつてゐた。彼女たちとともに「老いたのか、疲れたのか、傷つたのか、それとも不意にその機能に故障を生じ、方向感覚を喪失したのか、なんにしても、どこまでも、そして永遠にとびつづけるやうに見える大部分の蝗たちのような逞しさを、すでに失つてしまつた蝗たち」を目撃したのは、群れから脱落した「落伍者の蝗たち」に自己の身体を仮託させる体験になつた。この結果それまで〈個〉が盲従してゐた〈大集団〉を客観的にとらえかえす視点を持つことができたのである。戦場の底辺にいた朝鮮人慰安婦も、明日の生命の保証はない一般兵士も、死を目前にひかえた「落伍者の蝗たち」と同じやうに、やがては力尽きて軍の集団から脱落してしまう。しかしいかなる人間もまた、病み傷つきながら老いて死ぬ運命におかれてるのであつて、自己が「落伍者の蝗たち」のひとりであることを自覚できれば、民族や国家、性別をこえて〈個〉と〈個〉が共感しあえるという泰次郎の文学の到達点がここに示されている。

註

本稿は二〇〇七年四月一八〜二四日にかけて河南省での現地調査にも

とづいて執筆されている。

- (1) 「沖繩に死す」(「風雪」第一卷三号、一九四七年三月)
- (2) 防衛庁防衛研修所戦史室「戦史叢書 一号作戦(1) 河南の会戦」
(一九六七年三月、朝雲新聞社、四一頁)
- (3) 同右書、一一〇頁
- (4) 同右書、三二八頁
- (5) 同右書、三〇七頁
- (6) 同右書、三〇〇頁
- (7) 同右書、三五三頁
- (8) 劉震雲『温故一九四二』(竹内実監修、劉燕子訳、二〇〇六年四月、
中国書店、一一五頁)
- (9) 王全書編『河南大辞典』(新華出版社、二〇〇六年三月、一二九〜
一三〇頁)
- (10) 廣瀬頼吾「私の思い出(其四)」(「独旅」第六号、一九七四年六月、
二七頁)

〔おにし・やすみつ 本学教員〕